

# イギリス 写真週刊誌 『ピクチャー・ポスト』が見たニッポン

杉 村 使 乃

## はじめに

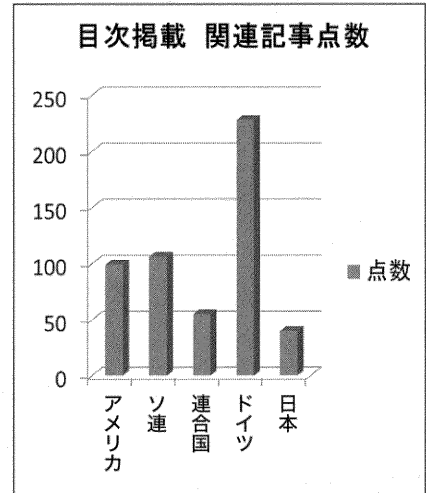
これまで敬和学園大学「戦争とジェンダー表象」研究会では、第二次世界大戦時における日本、ドイツ、中国、アメリカ、イギリスの代表的な雑誌を取り上げ、戦時下のジェンダーと民族の表象について調査・分析を行ってきた。国際比較を通して明らかになったことは、戦時下における国家の表象は敵であるか味方であるかによって左右される、実に相対的なものであるということだ。鳥飼行博は『写真・ポスターから学ぶ戦争の百年』において、各国における「敵」の表象のプロパガンダ性を明らかにしている。軍民一体となって戦う「総力戦」では、国民全ての協力を得るため、戦争の大義を宣伝するメディア活用と戦時動員のためのプロパガンダが大きな意味を持つ（鳥飼2008）。本研究会も文字と視覚情報を含む雑誌というメディアを用い、どのようにジェンダー、民族、そして国家が表象されてきたか調査に取り組んできた。本稿では、これまでも取り上げてきた写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』(Picture Post : Hulton's National Weekly, 1938-1957年 以下PPと記す)を用い、第二次世界大戦下、敵国としての「ニッポン」がどのようにイギリスの読者に向けて表象されたかについて考察する<sup>(1)</sup>。初めにこの媒体における日本関連記事の点数を確認し、後にイギリスにとっての第二次世界大戦の流れを、特に日本との関係に注目しながら振り返り、この雑誌における日本の表象の傾向について具体例を挙げ見ていく。

## 1. 敵国ニッポンの表象

ここで扱う媒体、写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』は、創刊から4ヶ月後には毎週135万部を販売し、第二次世界大戦下において、最も影響力のある媒体の一つで、男女共に広く読まれていた。戦時中は資源不足のため、88ページの紙面は30ページ程度へと縮小されたが、回覧が奨励され、1冊に5人くらいの読者がいたと言われている。初代編集長ハンガリー系ユダヤ人ステファン・ローラントは『私はヒトラーの囚人だった』という獄中記を残しており、1940年に彼が渡米した後はトム・ホブキンソンがその後を継いだ。両者とも一貫して反ナチズムという姿勢を取り、1939年に情報省は、公式プロパガンダ政策への協力をこの雑誌に要請する。ナチス・ドイツの侵略から民主主義を守る反

ファシズム戦争という大義を広く知らしめるのに相応しい媒体であり、この姿勢は敵国ドイツ、そして日本の表象にも影響している<sup>(2)</sup>。

右は国別に記事の点数を表したものである。1939年9月～1945年10月の期間に目次を参照したもので、該当ページ数にはばらつきがあるが、アメリカ99点、ソ連106点、連合国55点、ドイツ228点、日本40点となっている。日本の記事は概ね1ページか見開き2ページ程度で、やはりイギリスの読者にとって一番の関心事は対岸のヨーロッパ戦線であったことが伺われる。1941年12月7日（ハワイ時間）の真珠湾攻撃を受け、1942年1月に日本の特集号が組まれる。日本を特集したものはこの一点のみで、あとは断片的な記事である。

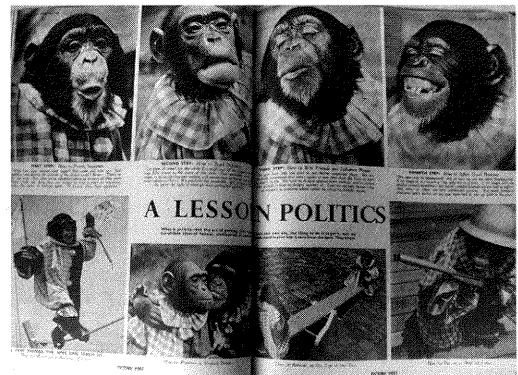


実際には太平洋戦線では「忘れられた兵士たち」(Forgotten Army) が過酷な戦いを強いられていたにも関わらず、一般大衆の多くにとって日本は遙かなる極東の一国に過ぎなかった。

次にイギリスにおける第二次世界大戦の流れと日本の位置づけについて、簡単に見てみよう<sup>(3)</sup>。1939年9月1日のドイツによるポーランド侵攻を受けて、9月3日にイギリスは対独宣戦を布告。これに続き、ドミニオンのカナダ、ニューファンドランド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ連邦は、イギリス本国が防衛と外交の責任を負うことを記した1931年のウェストミンスター憲章に伴い、即座に対ドイツ戦に参戦する。戦争初期は、イギリス国内では、ヨーロッパの遠くで行われている戦争という印象があり、まだ戦時という実感がわからない「まやかしの戦争」、「退屈な戦争」状態が続いた。1940年7月1日、ヒトラーはラジオで対英講和を提案する



1940年10月26日号枢軸国入りする日本政府 (図1)



1940年10月26日号「政治」を学ぶサル (図2)

も、イギリスはこれを受け入れることを良しとせず、これ以降イギリス本土は激しい空襲(Blitz)に見舞われる。

一方、1936年の日独防共協定(1937年伊加盟)は、1940年9月27日に日独伊三国同盟に発展し、日本は枢軸国入りする。日英同盟(1902-1923)を結んでいたかつての「味方」は「敵」となり、閣僚の面々が1940年10月26日号(図1)で紹介されている。向かって左上から、内閣総理大臣近衛文麿、商工大臣小林一三、文部大臣橋田邦彦、外務大臣松岡洋右、下の段は左から司法大臣風見章、陸軍大臣東條英機、大蔵大臣河田烈、無任所大臣星野直樹、が並び、主な経歴が紹介されている。執務中の洋装と、くつろいだ様子の和装が入り混じって紹介されている他は特に何の特徴もないと思われる。しかし雑誌として見ると「敵」を戯画化するしかけが含まれていた。次のページをめくると、図2の「政治を学ぶサル」(A Lesson Politics)が掲載されている。左上から、ステップ1「無実を主張する：キミの檻(ケージ)を侵略したって？ 食べ物を取ったって？ 動物界の安定を壊したって？ これは『侵略』(aggression)ではないよ。」ステップ2「抵抗すると喚き散らす。団結するサルたち。」ステップ3「我々は平和を望むもの、同胞への影響力を勝ち得る。」ステップ4「我々はならず者かもしれない。でも心は黄金。弱いものには乱暴かもしれないけど、世の中そういうものでしょう？」下段左から、「パワー・バランス、同盟を結び、序列を作り、武力を行使する。」「日本」という言葉は一言も使われていないが、類似した写真の割り付けを用い、連続して掲載することによって、欧米並みの「進化」をきどる日本を揶揄しているのだろう。19世紀後半から20世紀初めに資本主義の自由競争、帝国主義、欧米の人種・民族、そして文明の優位性を語る上で社会ダーウィニズムの言説が用いられたが、この「サル」の使い方にもその傾向が見られる。また日本による欧米の模倣という「進化」が上辺だけのもので、やがて内部にある野獣性が目を覚ます「先祖帰り」、あるいは「人種退化」(degeneration)までも示唆しているのかもしれない<sup>(4)</sup>。



“World Murder---or  
HARAKIRI?”  
1942年1月17日号(図3)

1941年12月8日(アメリカでは7日)真珠湾攻撃による日米開戦。1941年12月10日、マレー沖海戦で日本軍はイギリス海軍が東南アジアの制海権確保の為に派遣した戦艦2隻を撃沈する。1942年2月7日から15日にかけてシンガポールの戦い(Battle of Singapore)、そして2月16日にシンガポールは陥落する。極東の敵国の台頭に際し、PPは1942年1月に日本の特集号を組む。表紙の写真としては、日本人が登場するのは第二次世界大戦期でこの一点のみである(図3)。連合軍の男性表象と比較してみると、イギリス軍、連合軍は余裕のある笑顔が多く見られ、一人、あるいは二人の比較的アッ

ブのショットで豊かな表情を見ることが容易である。また戦場での男同士のつながりを印象づける表情と構図も多い（杉村2008）。一方、日本の兵士たちは、集団の一部で無表情、手にしているものは武器ではなくスコップ、全体主義的で、非近代的なイメージが全面に出されている。これらは、反ファシズム、全体主義の打倒、民主主義の擁護というイギリスの大義を支持するために強調したい点であったと考えられる。一見近代化されているかのように見える軍隊、しかしそこで見え隠れするのは「非近代性」・「野蛮性」である。キャプションに見られるように、その戦いは「殺人」(murder)であり、失敗は「ハラキリ」で償わなければならない。自ら命を絶つ点も理解しがたい大きな特徴として、日本関連の記事にこの後も現れる。

## 2. 「欧米」を装うニッポン

1942年1月17日発行の特集号で日本がどのように伝えられているか見てみよう。この特集号の解説はウォルター・シェラード・ヴァインズ。彼はオックスフォード出身の作家で詩、小説、批評などを手掛けていた。日本には、1923年から5年に渡り慶応大学で教鞭を取り、その間、秩父宮の個人教授でもあった<sup>(5)</sup>。ここでは、日本の特色について、天皇の存在、暴力性、また「欧米」を装っている様子がうかがわれる。

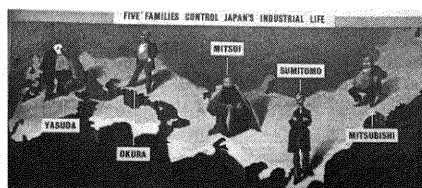


“The Puppet of Japan’s war-makers”  
1942年1月17日号 (図4)

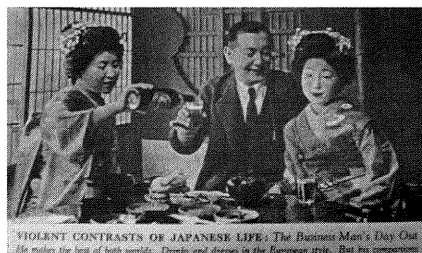
日本の二面性を象徴する存在としてとらえられている。日本人は、決して自らは理解することのできない「欧米」を模倣するヒステリックな群衆(“a hysterical mob, imitating unsuccessfully western methods they don’t really understand”)に過ぎず、「脅威に際した時に、暴力に訴える」と指摘し、関東大震災時の朝鮮人・中国人迫害、原・浜口首相兩名の暗殺(未遂)、国の暗部を取り仕切る黒龍会(The Black Dragon Society)の存在が例として挙げられている。

日本の産業については、日本地図上に北からMitsubishi、Sumitomo、Mitsui、

Okura、Yasudaと名前をつけた洋装男性の人形を据え、富が一部の財閥に集中していることを図式化している（図5）。また空に大量の黒煙をまき散らす工場の煙突の写真が掲載され、安いものを大量生産する日本の工場を批判している。洋装の男性と和装の女性たちが集う富めるものたちの園遊会が掲載される一方、東京の下町で海苔を干す女性について「スラムで暮らす漁師の妻、日本の代表的な朝食の海藻」と紹介されている。近代化・欧米化された富めるものたち（男性）と前近代的な暮らし・あるいは役割をする貧しいもの（女性）が対比されている。



産業界を牛耳る五財閥（図5）



欧米化と「伝統」の対照：ビールとゲイシャ、二つの世界を楽しむ男性



上：「従順」を身につけるスパルタ教育  
下：人身売買の容認（図6）



日本は平和のハト、英米はその巣に入り込み卵を食らうへびとして、軍部は国民に伝えている。（図7）

女性については、誰かの財産の一部であり、「フェミニズム」不在の「オリエンタル」な状況であると指摘されている。規律正しく、おかつ頭の正座した少女たちの写真には、スパルタ教育で従順さを身に着け、女性たちは、男性のために朝から晩まで働き、肉体労働（heavy manual labour）もこなす。その姿は、朝から晩まで働くナチのHausfrauよりもひどい。彼女たちは自分の人生に対する何の権利も有しない存在で、息子たちを生む機械（Breeders of men）でしかない。「結婚」は親が決めるものであって、恋愛（Love）は、家庭外（芸者・売春）で行われる。日本人はフランス人なみにsentimentalであるが、恋愛よりも「愛国心」が男性にとっては一番大事なものと考えられている、とある。また、人身売買・売春を容認する非近代性が批判されている（図6）。また、日の丸と鍵十字の旗を振る女学生、出兵する男性を見送る整列した割烹着の女性たち、プロパガンダ活動に協力する和装の女性など（図7）、日本の女性たちの戦争参加についても触れられている。

欧米の文明を洋装という形でまとう日本の非近代

性を示すもう一つの例として、1945年6月23日号を見てみよう。靖国神社での参拝を終えた白いロングドレスの皇后の姿は以下のように解説されている。

現代的なドレスと靴を身につけた白い姿がカーペットを敷いた階段を降りてくる。まるで洒落た結婚式や展覧会から出てきたように。実は彼女は亡くなった戦士たちに祈りを捧げてきたところである。彼女によると、彼らは「聖なる戦い」(a holy war)で亡くなったのだとのこと。彼女とこの国の民はこのように教えられている。日本人は神々の子孫であり、残りの人類はサルの子孫である。だから日本への戦争は神への冒瀆に値すると。この尋常ではない宗教において、彼女の夫、つまり天皇は高僧(High Priest)である。毎年、靖国神社に亡くなった戦士たちを参拝する。この神社には亡くなった戦士たちがみな祀られているという。今では350万人に上るが、選ばれし数名が記録されている。

「天皇」を「神」とみなす日本のミステリアスな、あるいは理解不能な点は終戦時の懸念材料となる。1945年9月1日号、「敗北した日本に立ち込める嵐の雲行き」(Storm Clouds Gather Around Defeated Japan)。ここでは、フジヤマの写真を用い、「神」と崇められていた天皇の今後について考察されている。フジヤマは日本のシンボルで、子どもの玩具や筆箱のデザインとしても頻繁に使われていると紹介した後、この山の神性に触れ、天皇のその後について以下のように考察されている。

天皇を生かしておくことはヒトラーを生かしておくことに匹敵し、最終的な勝利とは言えない。また日本人は、神の子孫である天皇がこのような災難をも生き抜いたと見なすであろう。若く勇敢な日本が、年老いて意地悪な欧米と彼らの容赦ない科学の力で敗北に追いやられた。このような観念を持たせてしまえば、将来的に「正当化された復讐」が企てられるであろう。誰かを介して、日本を統治するしかない。そしてその誰かとは天皇である。

1946年6月15日号では、万歳を捧げる年配の群衆に、帽子をとって挨拶する昭和天皇の姿、「民主化を始める日本の皇室」が表れる。

### 3. 『ピクチャー・ポスト』が見た「大東亜共栄圏」

日本は戦争の大義として、「大東亜共栄圏」の確立を掲げているが、PPはどのように日本のアジア支配を伝えたのであろうか。前述特集号から見えてくるのは、「欧米化」とい

う装いの中に見え隠れする、日本の「非近代性」・「野蛮性」である。PPにおける日本の表象を考えることは、日本のメディアが伝えた「大東亜共栄圏」を相対化する<sup>(6)</sup>。第二次世界大戦中に行った日本の残虐な行為は許されるものではないが、写真を通してヴィヴィッドに伝えることによって、連合国が自らの大義を正当化したことも事実であろう。1942年1月31号の読者欄（Readers on Japan）には、前述特集号にて、日本の残虐性をイギリスの読者に示してくれたことへの謝辞、日本との戦いの支持、自分たちの大義を確認に関するコメントが掲載されている。

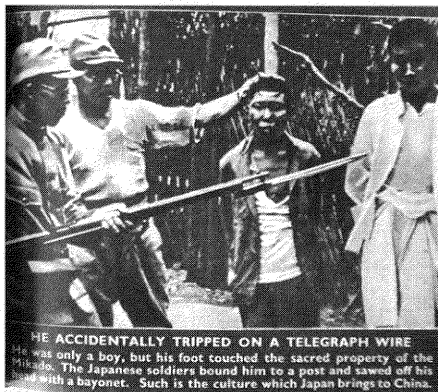
1940年5月4日号では、「日本の中国人動員」(Japan's Chinese Conscripts) が伝えられている。虚ろな表情の少女たちが、中国人との戦いで亡くなった日本人の死を悼み、中国側のゲリラ兵に銃を向けるよう、つまり同胞を討つように訓練されている様子が伝えられる。「征服され、虐げられ、崩壊する。侵略者たちの安全のために働く」と少女たちをこのように動員していることに対して厳しく非難されている（図8）。

日本の中国侵略については、その残虐性が注目されている。前述の日本特集号では、「どのように日本人は戦争をするのか。中国に尋ねよ」というページでは、生きた人間で銃剣の練習をする、電線を踏んでしまった少年に対し「ミカドの聖なる財産に足を踏み入れた」と銃剣を向ける（図9）、故意に赤ん坊を飢えさせる、抵抗する者の惨殺、反日行動を指揮した指導者の頭部を見せしめに吊るすなどの残虐な行為が遺体を含む生々しい写真が紹介されている。日本軍を象徴する武器として銃剣が頻繁に言及される。直接肉体に剣を突き刺すこの武器は、「戦争」よりも「殺人」を想起させ、日本の残虐性の象徴として表れる。1941年3月20日号、「日本が忘れた戦争」(The War Japan Forgets) においても日本兵が向ける銃剣に丸腰で立ち向かう中国の農夫が紹介されている。この記事は、すでに中国制圧のために3年半も費やしているにも関わらず、中国を制圧できない日本は、その焦りから中国との戦争をひとまず忘れ、東南アジア周辺の侵略を始めていると伝えられている。

1942年日本のシンガポール攻略は「シンガ

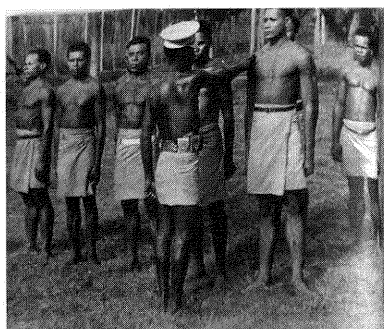


「日本の中国人動員」  
1940年5月4日号（図8）



少年に厳罰を処する日本兵  
1942年1月17日号（図9）

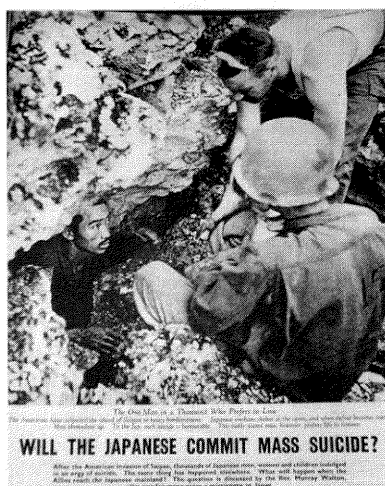




ニューギニアの抗日の兵士たちの訓練  
1942年1月24日号 (図10)



「征服されない」中国の子どもたち  
1942年5月23日号 (図11)



日本人は集団自決をしようのか  
1945年2月3日号 (図12)

ボール陥落大東亜の大局決す 帝国、不敗の態勢獲得 天皇陛下御満喫」と日本では華々しく伝えられるが<sup>(7)</sup>、少なくともPPは太平洋戦線における懸念を「焦り」という形では伝えていない。日本の「侵略」に立ち向かう現地の人々を描くことによって、「大東亜共栄圏」の裏側を伝えている。1942年1月24日号では、「日本に向かって」(To Face Japan)と題され、パプア・ニューギニアの抗日兵士が紹介されている。現地の兵士が招集され、ライフルの使い方の訓練をうけている (図10)。また、1942年5月23日号では「征服されない中国の魂」と、幼い子供たちにまで至る抗日の動きを伝えている (図11)。

PPは、日本の「大東亜共栄圏」の終末に起こった多くの悲劇——日本人の自ら命を絶つ姿——とその不可思議な国民性も伝えている。「日本人がいる場所全て、ビルマ、アッツ島、サイパンなどで連合国軍は自ら死を選ぶ日本国民を目にして来た。もし連合軍が日本本土に上陸したらどのような事態になるのか」、1945年2月3日号では、「日本は集団自決をしようのだろうか?」と疑問が付されている。日本で宣教活動を行っていたマレー・ウォルトン (Murray Walton) 牧師による考察が掲載されている。岩の下から覗いた男性は、サイパンで集団自決を図った1,000人に一人の死を選べなかったもので、連合軍の手が差し伸べられる (図12)。また崖から身を投げる日本人、逃げまどう母子が写真で残されている。幼い頃から「天皇のために死ぬ」と教えられた国民たちの屍累々。ブルドーザーで穴を掘って、埋められるのを待っている死体の山が生々しい<sup>(8)</sup>。

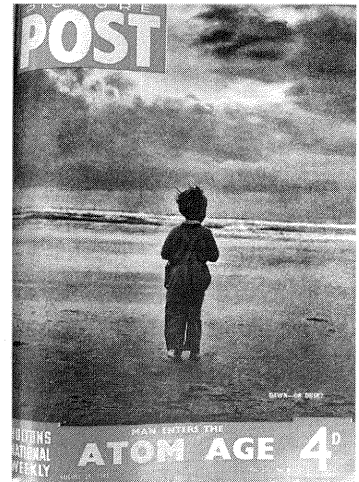
一方、東條英機の自殺未遂の報道では、「大東亜戦争 (The Greater Asiatic War) は正当であった。敗北はアジア各国、そして民族のためにも残念である。敵国の裁判にかけられたくない」、「死後、神と



なり国を守る神となる」(I will become a god to protect our land after my death.) と本人のコメントを紹介している。この記事には、「なぜ彼は救われたのか」(Why Was He Saved?), 「彼の戦争に対するくだらない正当化を聞くために彼の命を救う必要があったのか。どんな罰も重すぎるとは思えない」とコメントされている。

#### 4. 「被爆国」としてのニッポン

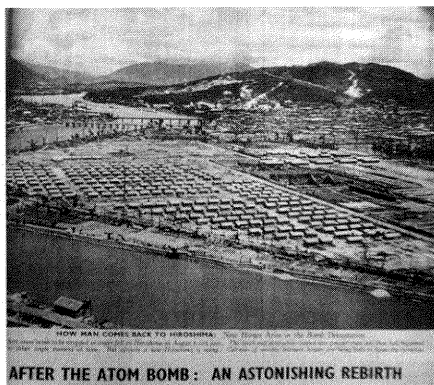
1945年に5月8日にドイツが降伏し、ヨーロッパ戦は終了。そして1995年8月アメリカでは14日、日本では15日に、VJ (Victory over Japan) を迎える。ヒロシマ・ナガサキの原爆投下の後には、VE-DAYに見られたような明るい開放感はない。1945年8月25日号では日本に投下された原爆によって突入してしまった原子力の時代がもたらす不安と問題点が、灰色の雲が立ち込めた水平線を見つめる幼い後ろ姿の写真で、先の見えない未来を象徴している(図13)。「原子力時代」(Atom Age) を特集したこの号では、主に原子力開発について検討されている。ヒロシマ・ナガサキの甚大な被害を伝えるというよりも、新しい技術としての「原子力」の到来に対する懸念、人類全体に対する脅威の到来という論調である。冒頭は原爆開発に携わったイギリスチームの一員と軍事評論家の対談。そして原爆リサーチチームの紹介。詳細な被害報告は見られず、原爆投下時のきのこ雲の写真は、宗教的な終末観、大惨事をイメージさせたいのか、レオナルド・ダ・ヴィンチによる大災害のイメージ図と一緒に掲載されている。また、関東大震災とヒロシマの写真(航空写真)を並列し、「自然による崩壊、人間による崩壊」(Nature's Ruin--And Man's) と比較対象として出している。人体に及ぶ被害として「原爆の写真ではない」で始まる記事では、ボルネオの対日本の戦いで使用された火炎放射(flame thrower)を浴びた人物が、炎が放たれてから逃げまどい倒れるまでの連続三枚の写真が掲載され、原爆はもっと速く広範囲にわたると解説している。そして「アングロ・アメリカン(英米)の手によってこの発明が成されたのは歓喜というよりも、悲しみであること以外のなにものでもない。…このような発明を次に成し遂げるのはソ連であろう」という世界の力関係における懸念が示され、「戦争という非常時において、イギリス人は一つになれた。この原爆というレッスンによって人類は一つになれるか」と記事は締めくくられている。しかし全体的には、被爆国から見れば、問題の核心から逸れた抽象的な記事であると言わざるを得ない。



夜明け… それともたそがれ  
1945年8月25日号(図13)

1945年10月27日号では、早くも「イギリスの原子力計画」(An Atomic Plan for Britain) が特集される。ヒロシマの女性被爆者のケロイドの顔面写真が掲載されているが、「世界への警告：ヒロシマの被害者。この恐怖を可能にした科学が、今や人類を豊かにするために利用できる」と解説している。原子力開発にゴーサインを出したイギリスの姿が浮かび上がる。ブリテン原子力開発チームのオリファント教授はインタビューで「アメリカは2年で原子力発電所を稼働させるだろう。この5年のうち、原子力を持たない国は世界のトップレベルの産業国から外れるであろう」と述べている。1945年12月8日には、原子力開発施設が建設されたハーウェル (Harwell) の古い村の姿と、開発された研究施設を対照させて掲載している。1954年6月にソ連が、続いて同年にアメリカが稼働開始し、イギリスも1956年にコールダー・ホール (Calder Hall) にて核兵器生産も可能なタイプの原子力発電所を西側諸国において初めて稼働させる。

1946年8月24日号では、1年前に未曾有の被害を蒙ったナガサキの様子が写真で伝えられている (図14)。タイトルは、「原爆の後：驚くべき復興」とあり、「放射性物質を取り除くことは難しく、長い間、生物が住むことは難しいと科学者は述べていたがそれは誤りであった。人と生物、自然の生命力はもっと強かった… 結局、原爆は最終兵器 (last weapon) ではなかった」と伝えられている。よく見れば画一的な住宅の並ぶ、個性のない街になっている。また本当に安全性が保証されていたのか多いに疑わしい。原子力という巨大な力のもとに「個」は消される。



原爆後の驚くべき復興  
1946年8月24日号 (図14)

## まとめ

第二次世界大戦下のPPにおける日本の表象について考えてきた。欧米列強と肩を並べて戦争に参加する日本の君主や軍人は「欧米」を装ってはいるが、その背後には欧米化あるいは近代化されることのない「伝統的な」日本が見え隠れし、そして戦場では残虐性があからさまになる。君主である天皇は「神」として崇拜され、権力と富を握っているのは一部の富裕層で、一般の日本人や女性、そして大東亜共栄圏の「同胞」たちは「被支配者」として表象される。装われた「欧米化」の裏にある、非民主主義的な部分や日本の残虐性は、民主主義擁護、打倒ファシズムというイギリスの戦争の大義の裏付けとなった。すべてをプロパガンダと見なすだけではなく、PPにおける日本関連の記事は、日本が認

めたくない戦争の記録として貴重な資料の一つとしても考えられるだろう。一方、日本を紹介するという点では、ハラキリ、フジヤマ、ゲイシャと言ったステレオタイプが目立ち、日本は当時のイギリスにとってやはり遥かなる極東の国で、ありきたりなイメージで解釈される存在であったことが伺われる。

ヒロシマ・ナガサキの原爆投下については、核兵器の恐ろしさより、むしろ核兵器開発、原子力開発という新しい技術としての「原子力」が注目されているようである。この報告は2011年3月19日に行われたが、その一週間前の3月11日、甚大な被害と悲しみをもたらした東日本大震災の後、この国際比較研究はある種のリアリティを帯び、国内外のメディアの役割、メディアが作る日本のイメージとはどんなものかを改めて考える機会となった。今、「ニッポン」という国に対して、どのようなイメージが生産されているのだろうか。一つ言えることはこの国のイメージは「フクシマから半径～キロ」によって変化したりするものではないということだ。

## 註

- (1) 本稿は敬和学園大学、戦争とジェンダー表象研究会主催の学術シンポジウム「第二次世界大戦とニッポン―表象・ジェンダー・エスニシティ」第一部「第二次世界大戦下、世界のメディアが見た日本」(2011年3月19日 於新潟大学駅南キャンパスときめいと)での報告をまとめたものである。*Picture Post* (1938-1945)の資料収集、表紙写真撮影にあたり、中央大学西洋史研究室に多大なるご協力をいただいた。ここに感謝を申し上げたい。
- (2) 『ピクチャー・ポスト』に関しては、拙稿参照。
- (3) 戦況については、主にピーター・クラーク、鳥飼行博を参照。
- (4) 社会ダーウィニズムに関しては、富山太桂夫『ダーウィンの世紀末』を参照。特にベンジャミン・キッド「社会ダーウィン主義は死んだか」は示唆的である。(富山1995: 207-222) 尚、日本人と「サル」の連続した掲載については、1938年10月22日号外務大臣宇垣一成の辞任(1938年9月)に関連した記事にも見られる。イギリスとの関係改善に貢献した彼とその家庭生活、一面全体に渡るアップの写真を掲載している。次のページにはチンパンジーが機関車のような機械に興味を持ち、慣れない様子で動かしているコミカルな記事「サル真似」(“Monkey Tricks”)が続いている。
- (5) Walter Sherard Vines (1890-1974)。PPによると6年間東京大学(Tokyo University)で教授をしていた、とあるが誤りと思われる。
- (6) この点は、加納実紀代の戦時下の日本のメディアにおける「大東亜共栄圏」表象研究と比較されたい。
- (7) 1942年2月16日「朝日新聞」一面(鳥飼2008: 206引用)
- (8) 1945年2月3日号 “Will the Japanese Commit Mass Suicide?”掲載の写真は、本研究会、平塚博子の報告によるとアメリカの写真週刊誌『ライフ』1944年8月28日“Saipan”掲載と同様のものである。

## 引用文献

- クラーク、ピーター。西沢保他訳『イギリス現代史1900-2000』名古屋大学出版会、2004年。
- 加納実紀代。「日本の戦争プロパガンダとジェンダー：『写真週報』の「大東亜共栄圏」「鬼畜米英」表象を中心に」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』第6号 2008年。
- 杉村 使乃。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』第6号 2008年。
- 。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』における「味方」と「敵」：英独の「空襲」の表象」『敬和学園大学人文社会科学研究所研究年報』第7号 2009年。
- 。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦のイギリス——女性表象再考：制服の女性たちを中心に——」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第8号 2010年。
- 鳥飼 行博。『写真・ポスターから学ぶ戦争の百年』青弓社、2008年。